

## 『再確認！カンキツ苗木の定植および初期管理のポイント』

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当  
副主査 高須陽介

カンキツ産地では園地の若返りや優良品種への更新など、生産力の強化に向けて改植に取り組まれています。

改植は、未収益期間を伴うことから、早期成園化を図ることが重要ですが、苗木定植後の病害虫の発生や生育不良による枯れ込みなど樹冠の拡大が遅れている園地も一部みられます。

将来、安定生産を行っていくためには、定植後の苗木の健全な生育が重要です。

ここでは、苗木の定植および初期管理のポイントについて述べていきます。

### 苗木の定植

苗木の定植は、発芽前に行います。例年の発芽始期は極早生で3月下旬ですが、近年、温暖化の影響で発芽時期が早まる傾向にあります。芽の状況を確認し、遅れないように実施します。

植え穴（直径60cm、深さ50cm程度）を掘り、掘った土壤に完熟堆肥（20kg）・苦土石灰（2kg）・ヨウリン（500g）を混和し、8割ほど埋め戻します。

傷んだ根は切り返して丁寧にほぐし、植え穴に十分に広げて植え付けます。かん水しながら棒やホースでゆっくりと突きながら根と土を密着させます。植え穴の土壤が沈降して深植えとならないように注意し、完全に覆土した時点で接ぎ木部が地上から2cm程度見えるようにします。

県内でも「ヒリュウ台」の利用が進んでいますが、「ヒリュウ台」は「カラタチ台」に比べて根域が浅いため、樹冠の拡大が遅れる傾向にあります。また、土壤の物理性や化学性に影響を受けやすいため、植え付け時の有効土層の確保と土壤物理性や化学性の改善が重要となります。そのため、石灰施用による土壤pHの改善や植穴に対し3割程度（慣行の1.5倍）の有機物施用を必ず行いましょう（表1、写真1）。

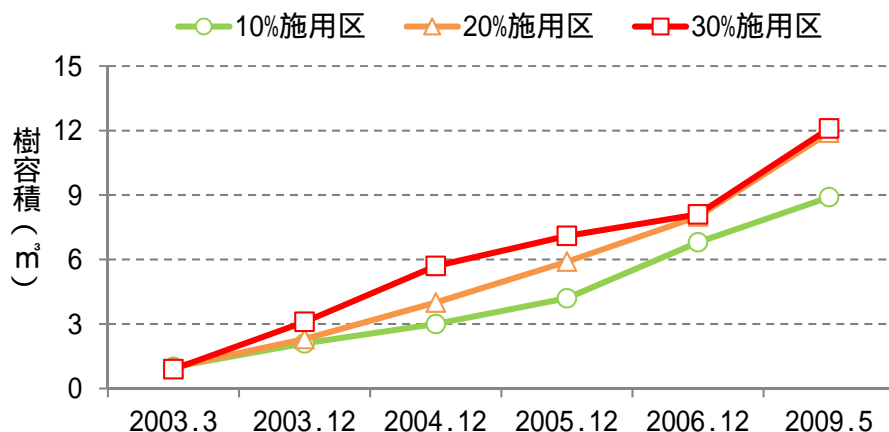


図1 ヒリュウ台「今村温州」の有機物の施用量の違いと樹容積の推移（佐賀果樹試）

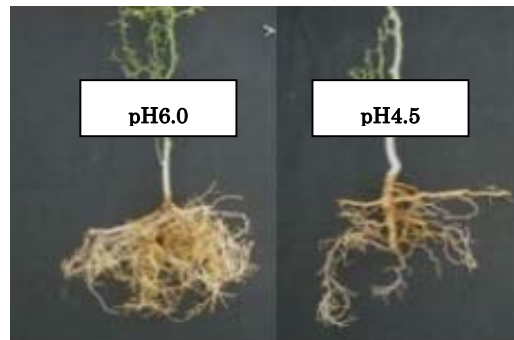


写真1 pHの違いによるヒリュウの地下部の状態（佐賀果樹試）

水耕栽培での実生試験

## 誘引

樹のぐらつきや倒伏を防止し、根の早期活着を促すため、支柱を立ててしっかりと主幹を支柱に固定して下さい。固定に使用した誘引紐は、樹の成長に従い枝に食い込む恐れがありますので、誘引の際はきつく締め過ぎないように注意して下さい。また、使用する紐はクラニロープなどの自然に分解しやすい素材のものを活用しましょう。

## 枝梢管理

主枝は、5本程度を主枝候補として残して、その後の生育状況を見てから最終的に3本程度にします。

主枝の先端部は、樹冠の拡大のため先端の切り返しや主枝の生育に影響するような枝の間引きを行います。先端部の切り返しの際、秋枝や細い枝などの充実不足の枝は、充実した部分まで戻って切り返しを行います。

新梢が発生してきたら、最も伸びが良い新梢を残し、それ以外の芽は芽かぎを行って下さい。「せとか」のように、一節から多くの新梢が発生し樹の生育が緩慢になり易い品種では、特に芽かぎを徹底するようお願いします。

## 定植後の管理

### かん水

土壌の乾燥程度を見ながら定期的にかん水します。土壌の乾燥が進み、樹が十分な水分を吸収できない状態になると、新梢や根の発生や充実が不良となり樹冠の拡大が遅れます。特に夏季は高温で乾燥しやすくなるため、土壌が過乾燥にならないようかん水を実施して下さい。

## 施肥

苗木は、肥料切れを起こさないことが大切です。硫酸などの速効性肥料を用いる場合、水に溶けやすく、すぐに効果が現れる肥料ですが、1度に多量に施用すると根傷みを起こす可能性があるため注意が必要です。分解が比較的緩やかな有機質肥料を用いると根痛みの心配が少なくなります。また、ゆっくりと肥効が続く肥効調節型肥料を用いると分施の必要もなく省力化が可能となります。苗木・幼木での施肥量については、施肥基準を参考にしてください(表1)。

発生した新梢の充実を図るためには、窒素主体の葉面散布が有効ですので、防除時に混用するなど効率的に実施しましょう。

表1 苗木・幼木の施肥基準(g/樹)

肥料成分	1年生	3年生	5年生	7年生	施肥量の配分
窒素	90	150	180	210	
リン酸	54	90	108	126	各樹種の施肥時期と配分に準ずる
カリ	54	90	108	126	

## 除草

今年は暖冬の影響で雑草の成長が早く、これから徐々に気温が上昇し暖かくなると、さらに旺盛に繁茂してきます。雑草が繁茂した状態では養水分の吸収が低下するだけでなく、病害虫の発生にもつながりますので除草はしっかりと行って下さい。また、敷きワラや黒ビニールなどのマルチは、抑草効果による作業の省力化を図るとともに、保水・保肥効果も高まり、樹体の生育促進にもつながりますので、ぜひ実施しましょう。

## 防風・防寒対策

風当りの強い園地や寒風・低温に遭遇しやすい園地は、落葉が多くなり生育が遅れてしまいます。また、強風により樹体がぐらつくと根の活着が悪くなります。このような園地では、あんどん栽培が有効ですので、少なくとも寒害の心配がなくなる時期まで是非実施して下さい(図1)。



図1 あんどん栽培

## 病虫害防除

近年は、カミキリムシやミカンハモグリガ、アゲハなどの害虫の発生が早まり、新梢を加害される被害が増加しています。樹冠の早期拡大のためにも早期防除を徹底し、新梢の充実を図りましょう。

また、平均気温が10℃を超えてくると、かいよう病などの病原菌も発生しやすくなりますので、こまめに園地を見回り適期防除を徹底してください。